

「ゴー、ウエスト！ ヨーロッパ激烈2週間」の巻

其の壺

ゴー、ウエスト！ なんという心地の良い響きだろう。ウエストレーシングカーズ出身の私には格別心に染み入る。この旅のテーマが「ゴー、ウエスト！」、当然BGMはペットショップボーイズ、まさに「GO WEST」だ。

今回の遠征の目的は大きく2つあった。一つはイタリアのコンストラクターを見学する。2つ目は自由な時間の中で日頃忘れてきた「人間性」を取り戻すこと。聞こえは堅苦しいが、要は羽目を外したいという事である。

レース文化は現在、ヨーロッパ型とアメリカ型に大別できる。その中でもヨーロッパ系統が私のグラウンドだ。(とは言いつつ、NASCARの現場にも少し関わったが・・・)ヨーロッパのレースのメッカといえば、勿論イギリスと考えられる。

多くのコンストラクターやチーム、関連業者が軒を連ねていること、そしてレース開催数、種類など多岐に渡ることが大きな理由である。

以前イギリスで働いていた時、本場で仕事していることに満足しながらも、また今でも付き合いのある友人達も出来たけど、少しだけ違和感を覚えていた。それは仕事面においてではなく、食事、気候風土、生活環境などのプライベートなことについてであったように思う。

例えば、食事に関しては私は人が言うほどイギリスの食事はマズイとは思っていない。ただし、どのカテゴリーの味付けも甘味があるのがちょっと忍びない。オレンジソース和えとか。トマトソースも甘い。だからイギリスでの私の食事は自然と「フィッシュ&チップス」に偏った。

あれにワインビネガーと砕いた塩をかけて、特にビネガーをよく染み込ませて(後から知ったことだが、実はイギリス人の通の食べ方らしい)食す。これが結構いける。

それはともかく、実は曇った天気もそう嫌いではない。たまに晴れたときの日の光がたまらなく神々しく感じられるからだ。ただし、人生一生をこの天気の下で暮らすというのはちょっと・・・。

それに、イギリス人の運転はとろい。アメリカでもそうだったが、外人は運転が上手くていつも飛ばしてるという偏見があったので、この事実を知った時はかなり面食らった。

という訳で、仕事のためだけに生きる限り、イギリスは決して嫌いではないし、むしろレースに関わるチャンスも多くていい国である。・・・が、なのだ。果たして本当にいいのか？ ここでいいのか？ という心の叫びをどうしても隠し切れない。何か、雰囲気や貧乏臭い人間になりそうな気がしてならないのだ。

本当はもっと素敵な、より自分の感性に合う、しかもレースのある国があるのでは？ というのがいつも心の何処かにあった。

早い話、そのターゲットがイタリアだったということになる。何せ、イタリアと言えば、泣く子も黙るかのフェッラーリの国、その他多くのスポーツカーやバイクの生産国である。

しかも社会科で習った記憶からすれば「一年を通して温暖な地中海性気候」で、食文化もトマトがあれば喜んでかじり付く私には申し分無いことばかり。イタリア料理が美味しいのは日本のレストランの繁盛ぶりが証明しているではないか。

更に、もう一つ大きな理由があった。そうそう、本当はこれが一番である。

「だっらーら」・・・。平仮名で書くと何ともお粗末そうに見えてしまう。正しくは、「DALLARA AUTOMOBILI」社だ。

4輪のレース業界人なら誰でも知っている。今や全世界のフォーミュラ3のカテゴリーにおいてほぼワンメイクと言う状況を作り上げた脅威のコンストラクターである。(もっとも、南米とかインドなんかのF3では未だにラルトとかも多いけどね・・・)

私は常日頃、ダララの仕事に感心しまくっていた。何故って？ 値段が安い、その割に速い。モノの作り方も安く、効率的かつ効果的な手法を存分に発揮している。そう、シンプルイズベスト、ローコスト・ハイパフォーマンス。私のモットーであり、元はと言えばウエストレーシングカーズの方針でもある。そんな根拠もあって、かねてから、とにかくこの目でどんな工場で作っているのかを確かめてみたいと言う願望があったのだ。

そうならばムーンクラフト(初めて名を明かした！ あ〜、すっきり。)を退社して自由な時間を持て余す今、行かなくてどうする。

かくして、万感の思いを秘めてエアチケットを買い求めに知人の働く某旅行代理店へと出向いたのであった。

さて、日本と欧州の往復チケットとなると未だに結構な値段である。航空会社を選ばないなら10万円を下回るものもあるにはあるが、私はマイレージを貯めているマイラーなので自然と航空会社は絞られる。問題は提携会社の中で最も安い価格を選ぶことにある。

今回はこのシーズンにしては割安感のあったアリタリア航空を選択した。チケット価格11万円ちょっとはどう考えても安い。即決。

ところがこの選択が大きな旅程の変化をもたらす事となった。(今となってはこれで良かったと思うのだが)

いつも使う航空会社なら関空から欧州へは毎日運行している。なのに、アリタリアはどうやら週の半分は飛んでいない様子。つまり、旅程を早く切り上げるか、少し延ばすかしなければ帰りの便にあり付けないと言う訳である。

ちょっと待て。いくらイタリアがいい国だったとしても、丸々2週間缶詰ではせつかく遠い欧州まで行くのにちともったいない。それに、欧州内なら最大2ヶ所までのストップオーバーが可能である。「う〜ん」「だったら」

ってことで結局、1週間イタリア、もう1週間をフランスの都、パリで過ごすことにした。最初の1週間、どうせレンタカーであちこち走り回るのは容易に想像できる、ならせめてもう1週間くらいはバカンスのつもりでパリで骨休めしよう、こういう作戦だ。

こんな経緯があって突然、なぜかフランスにも足を伸ばすというまるで「英語の通じない旅」になってしまったのだ。

そして晴れて出国の日を迎え、関空へと意気揚揚と京都の京阪電車というのに乗った。余談。ローカルな話で恐縮だが、京阪電車で大阪、淀屋橋まで出て、地下鉄で難波へ、そこから南海電車のラピートαで関空入りというルートを取った。実は京都駅から関空へ直接アクセスできるJR線「はるか」もあったのだが、全席指定の特急列車故にどうしても運賃が高くつく。

変なところで貧乏臭い私は、何とか少しでも金を浮かせよう、とあえて乗り換えの多い道程を選んだのだ。ところが、今回乗り換えが多いだけでなく、時間の関係で朝の超ラッシュにもかち合ってしまった。とんでもない目に遭ってしまった。

電車通学、通勤の経験が無い私はこの超ラッシュというヤツを初めて体験し、嗚呼、日本のお父さん方はなんと朝から頑張っているのだろうと関心しきりである。

実際は、そんな悠長な思いをはべらす余裕も無く、不自然な体型のまま不愉快な時間を過ごしたことは言うまでもない。

ん？ 何だろ、このポコって・・・?? うあ〜〜、オッチャンの股間があたる感触だったか……。熱くむせ返る車内で半袖の腕に汗がにじみ、触れてしまう。しかも、強制的に、だ。しかも前のサラリーマンがガムを噛んでいたのだが、それが「マンゴスチン」か何かの甘ったる〜い匂いを発している。匂いに存在

感があるだけに、あんたの吐いた空気を吸っているのかと余計意識してしまう。げっっ、最悪。「ぎゃ〜、助けて〜！！」という気持ちだ。ばか者、せめて朝くらい「クールミント」くらいにしときなさい！！ と、思わず喉元まで言葉が出るが、そこはグッとこらえる。まさに「忍」の一字だ。

とにかく、関空に到着するまでの間に既に精魂使い果たした感もあったが、出発ロビーに来てしまえば、これから目にするであろう未知の世界に思いをはせると自然と英気がみなぎって来るのだった。それに、ここからミラノまで12時間、そこからボローニャまで更にトランジットの待ち時間も入れて4時間。本当の戦いはここからである。

